

『天理教校論叢』誌の記事

著者名	論文名(タイトル)	号数	掲載頁数
今西 国弘	「おさしづ」の言葉に表示された「おさしづ」の意義	1	60
岩田 春雄	宗教的態度に関する調査報告	1	129
岩谷 松子	散文体「このよ元はじまりのお話」写本の研究	1	83
松田 武輝	天理教用語としての「理」に就いて	1	25
諸井 慶徳	おふでさきのローマ字化を試みるに当たりの諸問題	1	1
荒木 健夫	おさしづに於ける言葉の機能について	2	29-96
狩野 実	おふでさきに現れたる病理観	2	77
諸井 慶徳	基本弁証法としての月日の理	2	1
安藤 慶郎	「此世元始まりの御話」に於ける展開過程の構成について	3	17-56
芹澤 茂	おさとしの研究	3	1
中沢 勇助	「こふき話」の表現について	3	57
飯田 照明	ストラ-ンの The Religion of Divine Wisdom に対する疑問	4	1
金子 正	みかぐらうたの力	4	27
中島 秀夫	天理教教義学の概念と課題〔教義学研究ノート〕	4	119
江口 真澄	天理教信仰に於ける成人の本質的意義	5	81
大久保昭教	教会による社会福祉事業の諸問題 1	5	1
金子 正	「みかぐらうた」の研究	5	55
澤井 勇一	「みかぐらうた」の歌と手振り	5	125
白石 梅夫	おふでさき研究の歴史	5	15
中島 秀夫	天理教啓示論〔研究ノート〕	5	111
板山 公司	天理教に於ける人間	6	59
澤井 勇一	譬えの論理	6	97
芹澤 茂	おさとしの研究・再説・註	6-7	
澤井 勇一	おつとめの研究	7	19
高野 友治	教史研究の宿題	7	1
金子 正	おてふり研究への試み 手振りの型と意味	7	24
酒井正太郎	おてふり研究への試み 「みかぐらうた」と「てふり」	8	41
澤井 勇一	おてふり研究への試み 表現の問題	8	1
澤井 勇一	和歌体十四年本「こふき話」をめぐる問題	8	59
澤井 勇一	おさしづによるおつとめの研究 その1	9	73
中山 正善	おふでさきの書誌について	9	1
深谷 忠夫	天理教芸術に関する序章	9	211
伊藤 明德	おさしづの方言瞥覧	10	87
芹澤 茂	おふでさきの教理体系についての覚書	10	1
安井 幹夫	「おふでさき」にみる信について	10	43
澤井 勇一	達および諭達など(明治24年)	11	59
吉沢 讓	おふでさきにみる元始まりの話	11	15
上垣 敬一	おさしづに見る教会像	12	77
高野 友治	神と人間の間	12	1
松隈 据基	『稿本天理教教祖伝』講義要項参考試案	12	47
安井 幹夫	小栗純子『日本の近代社会と天理教』批判	13	1
片山 泰則	『おさしづ』にみる教祖のみちすがら	14	1
澤井 勇一	みちすがらの味わい	14	37
中島 秀夫訳	ヨハネス・ラウベ著「天理教の神名と神観念についての歴史的考察」	15	1
澤井 勇一	みちすがらの味わい(二)	15	15
山口 渡	「おさしづ」における「映す」「映る」の用語について	16	65
永尾 廣海	みかぐらうた本研究の諸問題について 上・中・下	16-18	
杉本 信一	おふでさきのはじめ五文字について	17	55
岩田 春雄訳	ヨハネス・ラウベ著「おやがみ(1)」	18	43
芹沢 守	教祖御在世時代の信仰者たち	18	113
芹澤 茂	おふでさきと世界だすけ	19	1
新井田建治	明治時代の教祖の法的環境について	19	53
小笠原一郎	たすけの要諦としての精神	20	75
澤井 勇一	みかぐらうた研究における一つの問題	20	59
中島 秀夫	おさしづにみる世界だすけ	20	1
岩田 春雄	宗教意識と行動	21	97
平沢 勇一	おふでさきの「体系的理解」に関する芹澤茂の研究	21	39
美並 伸久	みかぐらうた諸本における「附表」について	21	69
諸井 慶一郎	おふでさきの思召	21	1
芹澤 茂	牛馬考	22	1
中畝 正博	たすけ一条の精神	22	15
安井 幹夫	救済の構造	23	1
上原 道延	教祖称名考	23	33
塚田 光範	高野友治著『天理教伝道史』に見る布教伝道の展開	23	87
諸井 慶一郎	みかぐらうたの思召	24	1
仙田 善孝	神名「天理王命」の資料の整理	24	17

『天理教校論叢』誌の記事

著者名	論文名(タイトル)	号数	掲載頁数
諸井 慶一郎	みかぐらうたの思召(その二)	25	1
澤井 勇一	子が泣くでない	26	1
伊橋 幸江	教理の展開について	26	29
中山 信男	諸井政一『道すがら外編』による「道すがら」について	27	1
梅田 正之	誠について	27	21
中島 秀夫	生命の方向感覚	28	1
柏 明子	『稿本天理教教祖伝』について	28	29
土佐 剛直	「もと」をたずねて、今を生きる	29	27
澤井 勇一	夜泣き考	29	1
澤井 勇一	はなし一条、説教の準備	30	1
伊橋 幸江	「明治二十二年頃、松村亀次郎の伺」について	30	13
梅谷 大一	「たんのうはさんげ」ということ	30	47
中島 秀夫	教祖を仰ぎ慕って	31	1
中野 勇	「にをいがけ」と普請	31	13
伊藤 勇	明るい悟り、明るい教話	31	35
諸井 慶一郎	天理と大恩	32	1
宮下 一節	「おさしづ」にみる「たがいたすけ」の考察	32	37
杉本 栄一	増野鼓雪のいう「光明」と「暗黒」について	32	65
澤井 勇一	教典、教祖伝、そして、信者の菜	33	1
馬場 利朗	増野道興「天啓の声」「神言講義」の出版整理	33	21
萱間修太郎	「阿呆は神の望み」について	33	51
大久保昭教	変貌する社会福祉と宗教の役割	34	1-23
渡辺 英一郎	『おさしづ』に於ける「ひとすじ・いちじょう」考	34	25-50
板倉 望	「夜昼の理が分かる」と修行 - おさしづ解釈の一つの試み -	34	51-65
山澤 秀信	『稿本天理教教祖伝』の編纂についての覚書	35	
松村 孝吉	「親心」を知る - 二代真柱様の訓話集にみる「親心」について -	35	29-56
河内 孝昭	増野道興の語る真実と信仰 - 特に、天理教校別科生に対する教話について -	35	57-75
平田 雅義	原典における「木」の譬の理解	36	17-34
村田 幸喜	神一条の喜びと教会 - 特に、中山正善『真柱訓話集』にみる「教会」について -	36	35-66
小森 康晴	「家業第一、内々孝心」についてのおさしづの考察	37	19-50
橋尾 徳仁	「泥海古記」の輪郭について - 特に『みちのとも』(明治二十四年~昭和二十年)に表れた「泥海古記」をめぐって -	37	
梅田 正之	誠と「たんのう」について - 特に、「たんのうは真の誠」をめぐって -	38	1-38
澤井あけみ	「いんねん」のさとしの「場」 - 特に、「おさしづ」における「いんねんのさんげ」を中心として -	38	39-91
村上 幸一	「かしももの・かりもの」の教理理解についての一考察 - 特に、昭和二〇年代の『みちのとも』の記事によって -	38	93-117